

第三の矢

市川 浩

平成二十七年一月二十六日（月）晴

第二次安倍内閣アベノミクスなる経済政策を掲げ、金融、財政、民間投資の三方面に大膽なる成長戦略を導入すとて、夫々を「矢」に譬ふ。第一の矢たる金融の量的緩和は異次元の施策とし、第二の矢は積極的の財政出動として、公共投資の拡大を行ひ、一應の成果を収めたるものの如し。然れどもこれらの矢は第三の矢たる民間投資の拡大を實現するための呼び水に過ぎざれば、その兆未だ見えざるを以て、第三の矢の失速を指摘し、延いてアベノミクスの成功を危ぶむ聲も強しと云々。

我が國には敗戦による無一物より高度成長を遂げけるの成功体験ありて、これの再現を期待する向多しと雖も、當時との比較に於て論ずるを要す。即ち事業に要する謂はゆる金、物、人の三要素を比較するに、先づ資金に就きては、アベノミクスにて、當時より遙かに低金利にて利用可能なる半面、物、即ち如何なる製品を如何なる技術により生産するか、當時に比し革新性に於てかなり劣るを見る。電脳關聯の製品日々新たに登場するも、これ等殆ど既に米國にて製品化せられたるものにて、その零れをば日本市場にて争ふに非ずや。又人材に就きては、非正規雇傭による技術傳承の劣化に加へ、更に深刻なるは今日事業の經營、技術の中心を擔ふ世代のゆとり教育等による學力低下にして、米國一流大學への日本よりの留學生激減これを物語る。

經濟學者野口悠紀雄先生シャープにて莫大の投資して建設せる三重縣龜山の液晶テレビ工場の挫折を論じ、日本にてはビジネスモデルを考ふることなきを憂ひ給ふ。即ち一切の部品を龜山にて生産調達せむとする發想それ自體に失敗の原因ありとするは、さすが卓越の考察と感じ入りつ。嘗て鐵鋼業に於て、巨費を投じて巨大製鐵所を日本各地に建設して成功を收むるの故は單に當時の高度成長期に合致せるのみならず、そこに上吹轉爐、連續鑄造など高度に革新的技術を内包せるを忘るべからざるなり。龜山の液晶生産設備そのものには革新的技術ありけむ、然れども他の部品多くは在來技術によるものに非ざりきや。ましてそれらの部品世界各地にて安價に大量生産せらるゝに於てをや。

今日我が國にて革新的技術を求めらるゝ分野、人口高齢化、食糧、エネルギーの世界的不足、地球溫暖化、電脳犯罪の高度化など山積し有り。無論各分野の専門家による懸命の技術開發努力に敬意を表すること人後に落ちずと雖も、一般社會の協力と参加を要すること論を俟たず。その現はれこそ新しき事業の誕生なれ。斯く考ふればアベノミクスの第三の矢は民間に委ねられ、その正鵠を失はざるや否やは我が國の民力次第なり。

然るを第三の矢未だしの感蓋ひ難し。或るは目先の利益増加を目指して非正規雇傭の制限撤廢や醫療に於ける混合診療の承認を求め、果てはアベノミクスの効果なしと安倍政権の否定を論ずるもありて、根源的問題として技術水準向上に資すべき教育の擴充、改善などは餘り議論に上らざるを憂ふ。